fly, high!

フジキサエ

◆序

　スケートボードの練習をしていた佑人(ゆうと)は、トリックを決め損ねて、派手に転倒した。傍で見ていた圭が、笑いながらすっ飛んでいったボードを拾いに行った。
「派手にこけたなぁ」
「もうちょっとなんだけど……」
　唇を突き出して、佑人は頭をかいた。
　佑人の周りでは同じようにスケボーの練習をしている面々がいる。ここはスケボーパークではなく、ただの橋なのだが、夜も八時を過ぎると歩行者がいなくなるため、スケボー少年たちの格好の練習場になっている。
　圭は佑人のボードを手にして、戻ってきた。そのままボードを道に放って、足を乗せる。
「佑人は勢いに頼りすぎなんだよ。ちゃんとバランスをとらないと、トリックは綺麗に決まらない」
　言うが早いか、圭は道を蹴った。そして、ボードに乗ったまま、地面に右手をついて逆立ちした。ハンドプラント。先ほど佑人が失敗したトリックだった。
　あまりにも鮮やかで、佑人はため息をつくしかなかった。
　圭はこの場にいるスケボー少年の中で、一番巧い。圭は十八歳で、佑人は十四歳と若干年は離れているが、なぜか気が合い、よくつるんでいた。
「大会、明日だろ？　大丈夫なのか」
「ハンドプラントのコツを掴むまで、今日は帰らないよ」
「そうも言ってられないみたいだけど」
　圭があごをしゃくる。佑人と同じ顔をした少年が遠くから二人の様子を窺っていた。少年の顔は佑人と同じだが、目はおどおどし、弱気な雰囲気である。少年を見て、佑人は舌打ちをした。
「佐人(さと)、何の用だよ」
「母さんが……帰ってこいって……」
「今日は地方ロケじゃなかったのかよ」
「でも……家にいるんだ……」
「分かったよ」
　イライラとした表情を隠しもせず、佑人はボードを手に取った。
　ねぇねぇ、と圭が横槍を入れた。
「佐人ちゃんはスケボーやらないの？」
「僕は……運動は苦手で……」
　その物言いに、佑人がもう一度舌打ちした。
「ごめん、圭。明日、会場で」
「ん」
　ひらひらと圭は手を振った。
　佑人は足早に駅の方へ歩き出し、佐人はトロトロと佑人のあとを追いかけた。

◆母親

　海に面した高層マンションの最上階。二十畳もある広いリビングに、佑人は汚れたスケートボードを持ったまま、入っていった。
　リビングのテレビでは女優の藤原小枝子のインタビュー番組をやっていた。
「藤原さんは先日『母親にしたい芸能人』に選ばれていましたよね。実際にご家庭ではお子さんにどのように接していらっしゃるのですか」
「基本は放任ですよ。息子の自主性に任せています」
　佑人はその答えを聞いて、鼻で笑った。
　ソファーに座っていた人物が振り向いた。今まさにテレビに映っている、藤原小枝子その人だった。
「ありがとう、佐人。勉強に戻っていいわよ」
　佑人の背後にいた佐人は逃げるようにして、リビングを出ていった。
「全く。忘れ物を取りに戻ったら、あなたがいなくて、びっくりしたわ。お母さん、スケボーをやることは認めたけど、こんな時間まで出歩くなんて聞いてないわよ。今、何時だと思ってるの。夜の八時よ。子供は家にいる時間」
　佑人はうざったそうに顔を歪めた。
　小枝子は神妙な顔つきで、続ける。
「大会に出るんですって？」
「佐人から聞いたのかよ」
「やめなさい。大会なんて。危険よ」
「ヘルメット着用は義務だよ」
「でも、平面でやるんじゃないんでしょ。なんて言ったかしら。半球の……」
「バーチカル」
「そう、それ。危ないじゃない」
「初めてやるコースじゃないよ。バーチカルは子供だってやるし」
「それでもあなたが怪我をしないっていう保証はどこにもないじゃない」
　面倒くさそうに佑人は呟いた。
「それって、女優・藤原小枝子の息子が事故に遭いでもしたら、スキャンダルだから、言ってんの？」
「違うわよ！」
「『普段は息子の自主性に任せてる』って、さっき言ってたじゃん」
「あれとこれは話が別」
「結局、インタビューでは綺麗事を言ってるだけだろ。うそつき」
　言い捨て、佑人はそっぽを向いた。
　小枝子はため息をつくと、おもむろに財布を取り出した。
「いくら必要なの」
「は？」
「賞金が目当てなんでしょ。いくら必要なの。特別に出してあげるわよ」
　見る間に佑人は赤くなって、怒鳴った。
「なんでそういう考え方しか出来ないんだよ！　子供の気持ちも考えろよ！」

「だったら、親の気持ちも少しは考えなさいよ。佐人はいつも言うこと聞くのに、あんたときたらいつもいつも私に逆らってばかり」
　小枝子は疲れたようにひたいに手をあてた。
　カッとなった佑人は傍にあったごみ箱を蹴飛ばした。
「じゃあ、俺は出ていくよ。佐人がいれば充分なんだろ」
　スケートボードを持ったまま、佑人はきびすを返した。
　背後で小枝子が何かを叫んでいたが、佑人は振り返ろうとしなかった。

◆逃避

「なるほどね。一晩だけなら別にいいぜ」
　事情を聞いた圭は笑顔で了承した。
　ベッドの上でふてくされていた佑人は小さく「ありがとう」と呟いた。
「ちょうど良かったよ。俺、佑人に預かってもらいたいものがあってさ」
　圭は部屋の隅に立てかけてあったスケートボードを持ってきて、佑人に渡した。それは圭の愛用のボードだった。
　弾かれたように佑人は顔を上げて、叫んだ。
「圭、スケボーやめるのか！」
「やめねぇよ。休むだけ」
「……休むって……なんで……」
「俺はやりたいことがあんの。そのために大学に行きたい。だから、ボードは少しの間お休みってわけ。ボードが傍にあったら、滑りに行っちゃいそうだから。受験終わるまで預かっておいて。好きに使って、いいからさ」
　佑人の胸中に掴み所のない感情がにじんだ。寂しさというのか、失望というのか。
　圭は佑人の顔を見て、「なんて顔してんだよ」と笑った。
「佑人は本当にスケボーが好きなんだなぁ」
「だって、トリック決めて、周りにすげーって言われるの超気持ちいいじゃん。それにスケボーやってるとうるさいの全部なくなるしさ。俺の周り、母さんとか、佐人とか、うるさいのばっかで。スケボーやってるとそういうのなくなって、トリックのことだけ考えていられるしさ。それに、」
　なおも言い募ろうとして、佑人は言葉を見失った。圭の目がとても優しかったから。まるで、おもちゃ売り場で駄々をこねている子供を見る親のような。
「そうやって、周りをシャットアウトするのもいいけどさ、周りの声、ちゃんと聞こうとしたことあんの」
　圭の声音にかすかな苛立ちを感じ取り、佑人は目をしばたかせた。圭は微笑みながら「もう寝ろ」と言った。
「俺はちょっと勉強してから寝るから。ベッド好きに使っていいよ。おやすみ」
「……ん。おやすみ」
　佑人はタオルケットを頭からかぶって、ベッドの上に丸くなった。参考書をめくる音や、鉛筆の音が聞こえてくる。胸中に広がるもやもやした思いを抱えたまま、佑人は目を閉じた。

◆大会

　翌日、雲一つない青空が広がっていた。佑人は日差しにうんざりしながら、寝不足の目をこすった。
　練習をしようとバーチカルの方へ行こうとした佑人は、ふと足を止めた。会場の入り口近くに佑人と同じ顔の少年がいた。炎天下で帽子もかぶらずにいる佐人を見て、佑人はあわてて休憩所まで引っ張っていった。
「佐人、何しに来たんだよ。今日は予備校だろ」
「佑人の……応援に……」
「……え？」
「僕、佑人のスケボー、好きだから」
　佐人は胸の辺りを押さえて、微笑んだ。
「佑人のスケボー見てると、この辺がスカッとするの」
「佐人……」
「頑張ってね」
　佑人は嬉しそうに笑むと、かぶっていた帽子を脱いで、佐人の頭に乗せた。
「俺が優勝するとこ、ちゃんと見ていけよ」
　日陰にいるんだぞ、と言い残して、佑人はバーチカルへ走っていった。
　　＊
「さぁ、次はエントリーナンバー十五番、藤原佑人！」
　呼ばれて、佑人はバーチカルの中心へついた。競技用のストップウォッチがカウントダウンを始めると同時に、コンクリートを蹴る。
　予選は六十秒の一本勝負。難易度の高い技を、完成度高く行うことがキーになる。
（バランスをとって、トリックは綺麗に）
　圭に言われたことを思い出しながら、佑人は丁寧にトリックを決めていく。
　次第に、うるさいくらいだった周りの声援が、耳に入らなくなっていった。
　佑人がスケボーをしていて、心地よい瞬間だ。
『周りの声、ちゃんと聞こうとしたことあんの』
　ふと、昨日の圭の言葉が、佑人の頭をよぎった。
　周りの声なんて、うるさいだけだと思っていた。特に、小枝子と佐人の言葉は聞く価値なんてないと考えていた。
『僕、佑人のスケボー、好きだよ』
　佐人の言葉が佑人の脳裏にフラッシュバックする。
　いつもおどおどしている双子の弟。小枝子の言いつけだけは守る優等生。自分の意見なんてないんだと勝手に決め付けていた。でも、その中には佑人が予想していなかった思いを孕んでいた。
「さぁ、ラスト十秒！」
　実況の声を合図に、佑人は最後の大技をくり出すために勢いをつけて壁をのぼった。
（あのとき、母さんは何て言ってたんだろう）
　家を飛び出したとき、佑人の背後で小枝子が何かを言っていた。けれど、どうしても思い出せなかった。

壁の頂上で、佑人はハンドプラントを決めた。
観客からどよめきが起こる。
よし、と思った。
瞬間。
佑人は観客の中に、見知った人物を見つけた。
「母さ……」
途端に、佑人はバランスを崩した。
そして、そのまま落下した。

◆結

　目を覚ましたとき、佑人が一番はじめに見たのは泣き腫らした小枝子の顔だった。
「母さん……ここは……」
「病院よ」
　言った途端、小枝子の目から涙があふれて、こぼれ落ちた。
「……もっとちゃんと止めれば良かった……佑人が死んじゃったらどうしようって……」
　佑人は言葉を見失った。
　演技かと思ったが、違った。鼻水も涙もぐちゃぐちゃになった小枝子の顔は見れたもんじゃない。小枝子が演技で泣くときは、もっと綺麗に泣く。何度もテレビで見たから、知っていた。
「母さん、俺が死んだらいやなの？」
　質問が口をついてでてきた。
　間髪を入れずに、答えが返ってくる。
「当たり前でしょ！」
「佐人は……いるよ？」
「私はあんたと佐人を産んだの！　どっちかいなくなるなんて考えたくもない！」
　小枝子の言葉が、佑人の胸に沁みていった。
　あれだけうるさいと思っていた小枝子の声が、今は素直に受け止められる。
　佑人は「ごめん」と呟いて、小枝子の手を握った。
　小枝子とは反対のベッドの脇に佐人が立っていた。佐人は嬉しそうに微笑んでいる。
　佑人は手をのばして、佐人の手も握りしめた。

〈了〉